

が登れば登るほどあやしい霧は足もとを隠して包んでくる。おりることは出来ない。やむなくこずえのてっぺんへ登っていったんだとお。そうしてしんぼいまで登りつめたとたん、おそろしい狐のなき声がしたと思ふと、びっくりしてそこからまっさかさまに墜落して、ドシンと木の下にあおむけになったんだとお。しばらく気絶していたが、気がつくると霧は晴れて、そこに長い年月を経た七色の古狐がたっていて「やい法印、わしの昼寝を邪魔したうらみだ。気をつけろ。」と逆毛をたてて怒ったとみると奥山めがけて、ひとつとびに消えてしまったんだとお。

(五) あまのじゃくとうり子姫のはなし

むかしむかし、山の中に、じいさんとばあさんと一人娘のうり子姫がくらしていたんだとお。うり子姫は都のお大尽に近く嫁にゆくことになって、お嫁支度の機織りをして、トンカラリトンカラリとおさの音を、朝早くからひびかせていたんだとお。ある日じいさんとばあさんは用ができて、ほかの村に出かけることになり、うり子姫にいつてきかせたんだとお。「うり子姫なあ、急用ができてわしらは山の向こうに出かけてゆくが、一人で留守居をしてくれなあ。」うり子姫は「はい」と素直に答えたとお。じいさんは「なあたった一つ気がかりがある。いたずらで悪者のあまのじゃくが、わしらのいないのに気がついて、きつと山の向こうからやってくる。そのときはあまのじゃくに口をきくでねえぞお。」利口なうり子姫はそれを胸におさめて、留守居をすることになったんだとお。そして、晴れた日の縁先に機を出してトンカラリトンカラリと歌をうたつて機を織っていたんだとお。そうすると、しばらくして山の向こう何やら人をよぶ声があったんだとお。うり子姫は悪いことの起きる予感がして、障子をしめて機織りしていたんだとお。だんだん声が近づいて、